

三浦綾子さんは、昭和21年の春、肺結核で倒れた時、ある宗教の布教師の人からこのように言われたという事があります。「肺結核とらい病は、天刑病といわれていて、これは神様が与えた罰なんだと。肺病は、ハイハイと言わないから肺病になるのであって、情欲が深いと、この病気にかかるんだ」と。また、その人は、「顔にあざのある人は、前世において夫の顔を踏みつけにした人であり、盲人や聾啞者は、前世で何か罪を犯した報いか、親の罪を負っているのだ」とも語ったそうでもあります。

私たちが病気になる。そこには確かに病気になる原因というものがあるのでしょうけれども、それを簡単に罪の報いだとか、前世の因縁とかでかたづけしてしまうのは、あまりにも短絡的であります。今は医学も進歩いたしまして、あまり昔のような迷信めいたことは言われなくなりました。でも今でも、「因果応報」というのでしょうか、親の因果が子に報いるといった、そういう発想もそれなりに根強く残っております。特に、日本人なんかは、そういう発想がまだまだ多くあるような気がする訳であります。最近、話題になっていきます「靈感商法」。先祖の因縁話なんかをして、人の弱みにつけ込んで、このままで行ったらあなたの家族は不幸になるとか、災難に見回れるとか、いろいろ言って「恐怖心」を植え付けて、高額印鑑とか壺とかを売りつける統一教会の「靈感商法」。有名になりましたけれども、これも基本的には「因果応報」というものを利用したものであります。

さて、イエス様の時代、もう2000年近く前ですけれども、やはりこのような「因果応報」というような考え方が強くありました。イエス様たちがやってきますと、生まれつき目の見えない人が、物乞いをしていたというのであります。すると、弟子たちがイエス様に「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」という質問をしたというのであります。

このような質問は当時、当たり前のようにありました。生まれつき目が見えないのは、それは「罪の報い」でそうなった。あるいは「前世の因縁」でこのようになったという、そういう考え方が一般的であったようでもあります。

聖書の中にも、例えば、ヨブ記の中で、不幸に見回れたヨブを見舞いに来た人たちはこのような事を言っております。

「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が絶たれたことがあるかどうか。わたしの見てきたところでは、災いを耕し、労苦を蒔く者が、災いと労苦を収穫することになっている。彼らは神の息によって滅び、怒りの息吹によって消えうせる。」(ヨブ4:7-9)

罪のない人が滅ぼされるというような事はない。正しい人は神様から祝福を受け、恵みを与えられるのが当たり前であって、災難に遭うというような事はないというのであります。ヨブが今災難に遭って苦しんでいるのは、自分では気がつかないのかも知れないけれども、何か神様の前に悪い事をしたから、罰を受けたんだと、こう言う訳であります。

また、ヨブの息子や娘が不慮の事故で死んでしまったのは、彼らが神様に対して、何らかの過ちを犯したから、神様に罰せられたからなんだとも言います。

「あなたの子らが、神に対して過ちを犯したからこそ、(神様は)彼らをその罪の手に

ゆだねられたのだ。」 (ヨハ 8:4)

人間が分けの分からない不慮の事故に遭う、災難に遭う、それを「罪と罰」という方程式で解きあかすのは簡単な事かも知れません。何か悪い事をしたから、こうなった、バチがあたってこうなった。不慮の事故に遭ったのは、神様から罰せられた結果なんだと。このように何でもかんでも「罪と罰」という事で割り切ってしまうのはいとも簡単な事であり、しかしながら、それで問題が解決される訳ではありません。特に、その当事者というのでしょうか、実際にそのような状況の中にある人にとっては、「罪と罰」という方程式は、痛み以外のなにものでもない訳であります。

生まれつき目が見えない、それ故に、物乞いをする以外道がなかった人を前にして、「この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」というような「心ない質問」がなされた訳ですけれども、これは聞く当人と言うのでしょうか、生まれつき重荷を背負って来たこの生まれつき目の見えないこの人にとっては、どんなにか心に痛みを覚えるものだったのでしょうか。

しかし、イエス様の答にこの人は救われました。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」。生まれつき目の見えない人は、このような言葉を期待していたのでしょうか。当時の常識は先程申しましたような「因果応報の思想」に染まっております。誰かが罪を犯したから、このような人がいる、という発想であった訳であります。しかし、イエス様の答は当時の常識をくつがえすような突飛なものでした。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」。生まれつき目の見えないこの盲人の人は、このイエス様の言葉をどのように受け止めたのでしょうか。今まで、盲人として、物乞いとして、みんなから蔑まれてきた、そのような自分に対して、このように語って下さるお方がおられる。普通の人以上の何かを、イエス様の中に感じ取ったとしてもおかしくありません。しかも、イエス様は続けてこう言われたのであります。「神の業がこの人に現れるためである」と。これは驚き以外の何ものでもありません。弟子たちも驚いたとは思いますが、それ以上にこの人はびっくりしたのではないのでしょうか。「神のみわざがあらわれる」。それはすばらしい事であります。

それでは、本当に神様のみわざが現れたのでしょうか。現れました。生まれつき目が見えなかったこの人の目が見えるようになったのであります。勿論、これは結論ですけれども、結果として、彼の目は開かれ、ものが見えるようになった訳であります。

それでは、どのようにして見えるようになったのでしょうか。聖書には、このように記されております。

「イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、「シロアム・・・『遣わされた者』という意味・・・の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。」

イエス様は、病気の人をよく癒されましたけれども、普通イエス様が病気の人をいやされる場合、その人に口で命じて病気をいやすという事をよくされております。例えば、汚れた霊に取り付かれた人に「この人から出て行け」と言われますと、汚れた霊が出て行ったとか(マルコ 1:21f.)、らい病を患っている人には「清くなれ」と言ってらい病をいやされたとか(マルコ 1:40f.)。また、中風の人には「起き上がり、床を担いで家に返りなさい」と言っていていやされたとか(マルコ 2:1f.)、また、手の萎えた人には「手を伸ばしなさい」と言って

いやされたとか(マルコ 3:1f.)、普通は「言葉でもって命じて」病気をいやすという事を、イエス様はされた訳であります。

しかし、今日のお話では「イエス様は地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった」というのであります。そして、「シロアムの池に行行って洗いなさい」と言われました。どうして、イエス様はこんなめんどろな事をされたのでしょうか。

これは、あくまでも想像でありますけれども、イエス様はこの人を試されたのではないでしょうか。イエス様が病気の人を癒されたとき、イエス様はよくこういう事もいっておられます。「あなたの信仰があなたを救った」という言葉であります。12年間も出血が止まらない女の人が、イエス様の衣にでも触ればいやしてもらえるのではないかと思っ触りますと、病気が治ってしまったというお話、皆様ご存じだと思いますけれども(マタイ 9:22、マルコ 5:34、ルカ 8:48 の共観福音書に載っております) その時、イエス様はこの女の人に「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた訳であります。また、盲人バルティマイをいやされた時も、イエス様は「あなたの信仰があなたを救った」と言われました。イエス様に香油を注いだ罪深い女の人にも、イエス様は「あなたの信仰があなたを救った」と言っておられます。

イエス様が、この生まれつき目の見えない人に対して、唾で土をこねて目に塗り、「シロアムの池に行行って洗いなさい」と言われたのは、「あなたの信仰があなたを救うのだ」という事を暗に示しておられたのではないのでしょうか。

シロアムの池、それはエルサレムの南東部にありました。エルサレムの神殿から約 800メートルぐらいの距離だそうですが、生まれつき目の見えない人がそこまで行くのは大変な事あります。普通の人が 800メートル行くのと、盲人の人が 800メートル行くのとでは、これは雲泥の違ひがあります。いつも行っている所であるならば、さほど苦労しなくても行けるかも知れませんが、でも、もし初めての所だとするならば、これは大変な事だったと思います。しかも、シロアムの池に降りるのには、更に石の急階段を下って行かなければなりません。水面は何メートルも下の所にあつたのであります。ですから、このような事から考えれば、この人が「シロアムの池に行つた」というのは、そうとうな覚悟と、また、確信がなければ出来ない事であつたと言えるのではないかと思うのであります。

彼は、途中で何を考えていたのでしょうか。生まれつき盲目のこの目が、唾をまぜた泥を塗っただけで治るものだろうか。シロアムの池に行つても無駄足になるのではないだろうか。そんなふうを考えていたのでしょうか。もし、そうだとするならば、こんなにもシンドイ思いはしなかつたと思います。この人は今まで出会つたことのない感動と感激を胸に秘めて、ただイエス様を信頼して一歩一歩「シロアムの池」に足を運ばせて行つたのではないのでしょうか。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」。イエス様のこの御言葉を信じ、彼はひたすら「シロアムの池」に向かつて行つたのではないのでしょうか。

そして、彼は喜びに満ちあふれました。今まで一度も見ること出来なかつたものが、目の前にうっすらと、そしてハッキリと見えるようになったのであります。生まれつき目が見えないという状態がどういふものなのか。目あきの私には分かりませんが、見えなかつたものが見えるようになるというのは、どんなにすばらしい事か、それは想像に難くありません。

とにかく、この人は目が見えるようになりつた。それは彼の信仰の賜物と言つてもい

いのではないかと思います。聖書には書いてありませんけれども、イエス様がこの人と再度出会った時、「あなたの信仰があなたを救った」と言われたとしても、決しておかしくないのではないのでしょうか。

ところで、このように、目が見えるようになったこの人ですけれども、彼は肉の目だけではなくて、心の目、霊の目も開けられたのではないのでしょうか。それは先程ご説明いたしました「シロアムの池」に行ったというこの人の姿の中に現れていると思います。彼は「イエス様を信じて」「イエス様の言葉を信じて」シロアムに向かったのであります。シロアムまで行くのは面倒だということになれば、彼は途中で目を洗ったかも知れません。でも、彼は最後の最後までイエス様の言葉を信じ続けました。そして、信じる所に「神様のみわざ」栄光が現れたのであります。彼はイエス様の中に、自分を救って下さる救い主の姿を見ていたのではないのでしょうか。そして、実際に自分の目が見えるようになって、ますます彼は確信を持つ事が出来たのではないかと思います。

詩編には「御言葉が開かれると光が射し出で、無知な者にも理解をあたえる」という言葉があります(詩編 119:130)。私たちは、今日のお話を通し、また特に、イエス様の御言葉を通して、いろいろな事を教えられました。一つは「因果応報」という考え方の間違い。それから、神様のみわざがどのようにして現れるかという事、いろいろな事を教えられました。イエス様の御言葉を信じる時、私たちの常識では測り知ることの出来ない世界が、そこに展開されて行きます。今日もイエス様を信じ、御言葉に支えられ、それぞれの務めにいそしむ者でありたいと思います。